



木 2
480
2



助辭本義一覽下卷

本書本義考は此條よりさうありを約して、初學は厚の人、
彼頭挿抄、五の諸、八千種書とけ、あう、類、書とて、さうも、
の、に、を、け、も、を、わ、う、奇、に、は、さ、も、心、を、い、り、つ、つ、勿、れ、て、彼、書、
と、も、ふ、か、せ、つ、品、格、や、も、を、い、り、の、さ、れ、同、あ、ら、し、人、の、あ、ら、い、も、
あ、ら、れ、る、奇、も、も、の、中、より、あ、ら、し、つ、よ、集、め、る、さ、う、の、あ、ら、い、を、
あ、ら、た、ら、う、つ、多、く、は、い、ら、る、に、を、け、あ、れ、い、で、人、の、奇、の、よ、に、そ、
と、み、ま、う、つ、用、ひ、を、さ、ら、う、あ、ら、け、ん、さ、れ、ば、い、ま、の、さ、れ、人、も、も、を、人、
の、さ、ら、れ、奇、の、よ、に、を、け、る、を、わ、う、に、限、り、あ、ら、し、い、と、あ、ら、い、の、あ、ら、
教、え、ら、れ、う、も、の、よ、に、い、ら、れ、る、を、い、ら、れ、ま、し、と、い、つ、先、の、貫、之、集、と、躬、
恒、集、と、を、合、せ、る、に、貫、之、集、と、け、躬、恒、の、よ、れ、さ、う、に、を、け、ら、れ、る、躬、恒、

かどのぞぬのそとぬちて下知るをあるごとくし凡ての辞ども皆此
てうを以ておぼして右の切も續く二のんどもよくわらむもまななり
程下の三十三段より以下二精と名ける辞どものうちを又そつとてし
ぬに又つとつとあるは是より下の受辭どもを多く一音に解ま
る中にも妹よ此二精の活き辞を解し難く論をた言いつくそん
ふくしそをきくはほくを既つとてしづきづつとれとほくは
辞のしほくはほくをほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
居てそちのの本義又ほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
ほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
ほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
ほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
ほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
ほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは

抑もさあれそのの多ければありちりてのほくのでよもほ
うきもきびがほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
では本義より論しほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
彼説ならせぬ歎もほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
の辞こそはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
しあらん人を打つけほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
効くゆありて今年ゆよを来季れ見よれみづしを打えよ
かどはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
ほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは
願みて後ほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくはほくは

第一段 ちうし まい くれ 五十七

此ハ所謂き換る也。かく直にきに換るは希し。是を別と名するは、
彼、紐鏡に出せる。辞、ものの中、しつゝ、あし、の、く、し、ひ、し、ひ、し、ひ、し、
あ、の、如、く、な、ま、の、く、く、さ、む、さ、む、さ、む、さ、む、さ、む、さ、む、さ、む、さ、む、
さ、行、れ、通、音、め、て、古事記上卷、宇都志伎青人草之落、苦瀬
而、患、惚、時、と、ある、瀬、又、萬、葉、六、ノ、山、乃、曾、伎、野、之、衣、寸、見、世、常、と、ある、曾、伎
の、曾、る、も、是、也、此、等、の、瀬、も、曾、伎、も、物、の、際、界、と、云、語、り、て、中、古、の、奇、し、い、れ
一、き、瀬、う、れ、一、き、瀬、あ、れ、な、ら、ぬ、も、喜、き、際、界、哀、き、際、界、逢、之、際、界
涯、の、一、也、河、ノ、淀、瀬、迅、瀬、な、ら、ぬ、瀬、も、本、ハ、水、脉、ノ、涼、さ、い、浅、さ、な、ら、ぬ、さ
の、通、音、め、て、共、ニ、其、際、界、涯、と、云、言、な、ら、ぬ、一、ツ、の、名、と、な、ら、ぬ、也、後世の人、
一、き、瀬、逢、瀬、な、ら、ぬ、云、瀬、と、却、て、河、な、ら、ぬ、縁、語、と、の、み、思、ふ、め、れ、ど、然
し、非、ず、古、事、記、に、川、な、ら、ぬ、寄、て、ら、み、ら、ぬ、其、所、の、奇、し、い、の、み
也、河、の、縁、語、な、ら、ぬ、只、何、と、な、く、い、へ、る、奇、し、い、文、も、多、く、見、ゆ、
後、世、に、西、行、の、奇、し、い、な、ら、ぬ、と、も、一、と、云、語、り、せ、ん、時、鳥、山、田、に

原の移れ、村、此、ほど、かくて、右の、移、れ、の、外、も、下、に、を、添、て、云、語、を、移、り、
の、奇、し、い、移、れ、あ、ら、ぬ、し、か、つ、て、右、の、移、れ、の、外、も、下、に、を、添、て、云、語、を、移、り、
多、く、見、ゆ、と、云、語、り、せ、ん、時、鳥、山、田、に、
添、て、直、に、云、語、を、換、格、と、云、元、も、異、な、ら、ぬ、但、し、の、言、の、ま、は、れ、此、の、離、れ、て、別
小、添、れ、る、も、一、と、云、語、り、せ、ん、時、鳥、山、田、に、
て、皆、同、し、い、な、ら、ぬ、と、云、語、り、せ、ん、時、鳥、山、田、に、
一、と、云、語、り、せ、ん、時、鳥、山、田、に、
語、を、上、の、言、れ、活、く、と、下、の、言、れ、活、く、と、ある、例、多、き、も、あ、る、也、彼、神、社、の
膝、木、と、上、と、活、り、て、水、木、と、も、云、下、と、活、り、て、千、木、と、も、云、類、の、ゆ、し、
万、葉、十、七、ノ、山、河、乃、曾、伎、敝、乎、登、保、美、同、十、九、ノ、天、雲、能、曾、伎、敝、能、伎、波、美、な、ら、ぬ、
是、也、又、下、段、
此、段、の、ま、は、稀、一、別、を、な、ら、ぬ、と、云、語、り、せ、ん、時、鳥、山、田、に、
ち、る、が、此、ハ、為、の、義、也、と、云、語、り、せ、ん、時、鳥、山、田、に、

凡十三

されどもふれなれり「心のなれどもかみのありはるの目

いれり」
「結ひしも有り。そは下のりの條と云。現在の

古
志して

まじり

拾十六
「の

月十一
「の

こゝの格として右の經燒く舉ぐる群中と云れは

「の受を給く重みもさ故もあれは」

「の受を給く重みもさ故もあれは」

「の受を給く重みもさ故もあれは」

第廿段

おま

ふ

ちう

ふとて往既の義也万葉ふまきか

「は後拾十三」

「は後拾十三」

「は後拾十三」

「は後拾十三」

「は後拾十三」

「は後拾十三」

「は後拾十三」

「は後拾十三」

「は後拾十三」

物と爲レ作ル其物の無キヲ説シて爲ス作ルもひるちぢなれば君のそとに

拵ヘてまひ即ス爲スすむも多ク也多クハ色を白の虚無なるも本ノと漆

後青赤黒等レ色をまシゆくと同シく也かクてス救渡ス撈ス統ス總ス維ス

又合ハの類も爲シと元ヲてつシ詞又下ニ附テ任サ寄シ遣ル起ス神指サ載ル失フなス也

爲スとて法ヲてつシ詞又下ニ附テ任サ寄シ遣ル起ス神指サ載ル失フなス也

と程同シ此類ハ悉クいクも而シて他ハ省スる凡クそる音十行の中齒の音

と知リ行ト此ト行トの也也音ヲてつシ詞又下ニ附テ任サ寄シ遣ル起ス神指サ載ル失フなス也

と初メるガみハ物ト行ヲてつシ詞又下ニ附テ任サ寄シ遣ル起ス神指サ載ル失フなス也

一とつりヲ中ニ行ハ音ハ音ハ多クも人ノ取行ノ方ニゆキ牙ハ音

と下の口ニ行ハ音ハ音ハ多クも人ノ取行ノ方ニゆキ牙ハ音

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

と行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト行ノ音ヲもト

万葉上、有字と添し、
聞有キケリ、用有ヤケリ、行有ユケリ、敷有シケリ、生有ナケリ、書有カケリ、
同シれも、とすに
書カす。

第十四段

移ウツスと、うつせり、
照有テラヒおまじと、きる、この例れコトし。
移ウツスと、うつせり、
照有テラヒおまじと、きる、この例れコトし。

第十五段

打ウツと、うたせり、
放ハナツと、はなせり、
待有マツ、持有モツ、勝有カツ、打有ウツ、敷有シ、
と、きる、程上ハジメのコトし。

第十六段

此へ、まの、特用也、言コトと、かゝり、思オモと、はらり、
逢アヒと、あひり、習ナラと、なかり、
習有ナラと、出デ、例れコトし。

第十七段

沈シヅムと、ちぢり、
清スミと、よみり、
沈有シヅム、清有スミ、
沈シヅムと、ちぢり、
清スミと、よみり、
沈有シヅム、清有スミ、

第十八段

積ツクと、つくり、
散チルと、ちり、
積有ツク、散有チル、
積ツクと、つくり、
散チルと、ちり、
積有ツク、散有チル、

終らざりてむゆづりしものありしとき。若しむ時ハ以畢のねなれば。とね
と君の如く。心一往とくも入試して。上下の續き。叶ひし。若し居る也。又上の不
のねなれば。とねと。不と。つて。將どを。其処のうりに叶ひし。もれ居る也。
又此二のねと受る辞の。大うこれ定りといふ。不のねも。第一此韻。カサタハハ
ヤラと。又第四の韻。エケセテ。不へメエしと。より連きて。亦二此韻より。續き。
彼天の川原。生ね物ゆゑ。などの。数。いと稀。ハ。あれど。こハ。不見。
不居。不似。等の。動らね。詞の。れ。な。る。故。也。常。ら。ち。ら。ね。ち。り。ね。ぬ。ぬ。
此。こ。ね。な。ど。活。く。又。畢。の。ね。ハ。第二の韻。キ。シ。チ。ニ。ヒ。ミ。イ。リ。と。又。亦。四。の。韻。ケ
セ。テ。不。へ。メ。エ。し。と。より。續。き。亦。一。の。韻。より。を。は。げ。う。は。是。又。二。の。差。を。より。
其中。こ。互。ハ。亦。四。此。韻。より。續。く。の。と。を。た。が。終。ら。り。き。づ。ぐ。や。く。な。れ。や。し。
こ。も。兩。義。不。且。る。處。也。既。云。づ。ぐ。や。く。只。下。の。か。り。に。叶。ひ。て。は。て。は。る。わ。ざ
な。れ。バ。却。て。は。ら。り。そ。し。く。け。ね。の。用。ひ。さ。ら。は。せ。の。人。は。終。り。得。る。こと。
ま。つ。る。終。り。か。り。に。い。う。く。と。い。ひ。お。く。也。若。お。及。ぶ。か。く。さ。ら。に。事。と。く。と。
と。又。い。う。で。や。し。も。も。つ。の。あ。る。也。ゆ。ゆ。安。ま。と。や。得。あ。く。ま。と。に。ら。り。て。也。

第二十段

此つて。竟の義より。み。ら。ハ。見。竟。み。つ。也。聞。竟。い。つ。也。言。竟。い。つ。ハ。
思。竟。い。つ。也。暮。竟。い。つ。ハ。無。在。竟。の。也。也。此。つ。も。恒。つ。て。と。活。きて。
つ。そ。右。外。も。ハ。つ。な。り。ハ。竟。な。り。け。し。ハ。竟。い。つ。ハ。竟。い。つ。ハ。竟。
ら。の。を。又。い。つ。を。い。つ。ハ。竟。い。つ。ハ。竟。い。つ。ハ。竟。い。つ。ハ。竟。
も。竟。ぬ。也。と。して。此。段。の。つ。も。第二の韻。と。第四の韻。より。は。げ。く。と。亦。上。の。ね。と。同。じ。
又。而。有。來。有。往。有。竟。有。等。何。也。も。過。去。の。辞。な。る。中。に。た。る。け。る。ゆ。え。迄。ハ。
ま。の。あ。り。の。つ。ま。で。に。う。く。て。こ。の。つ。も。あ。れ。ど。此。つ。の。こ。も。ま。の。あ。り。の。つ。に
ま。か。り。て。い。も。は。る。も。竟。の。義。より。て。就。中。に。こ。の。と。れ。重。なる。故。也。又。い。つ。し

何事も所依進退より出づるもあはれ。

玉の結ぶ玉をめぐりくるとかけをみぶつよめついでいづつとついで下
の六段の格也他をよつとてふらふとていづつとついでは十段の後也。

第廿七段

ぬ いぬ ぬる いぬる ぬれ いぬれ

此れもよれ十九段から畢のぬれどもよれと結との二音の結まじりたり。
そそいぬえぬなどハハの活きも也かえぬえぬなどその活きける
うやしよその詞れもつとて去ハ去往とてうやく本語のよれ出死ハ去往
の約りて出づる也其他も是く准くべし。

第廿八段

ふ いふ ぶ いぶ ぶれ いぶれ

此れも経のよれ也音義よれ廿一段は経経の條より出但此段は擧げよれ
添戀生調存數等の辭の中長経數経取経よれ彼経のよれ也誰
ソフ コフ オフ タソフ ナカラフ カソフ

こし合点ゆくりとどろの添戀生もやとて経のよれとていづく耳遠きつらしこハ
喉音の中腑よれ也息吹の氣の物と音増えける方れ統りたり活ゆる辭ども
也凡そ天地間の物何れは息氣助ちれて生育せざる物のも人も息氣
の通へば生てもれ火を吹され消水は流され死ねも行も同一喉音な
るに産活息得生などよる類の多うとてよく合せて考ふべきなり。

玉の結ぶ玉中自他より依て活きのうつると添を自添ときたはよれ人添物
時をよれいづれとよれや世の人添なるともいふていづれとて云て
まよとていづれをよれよれとていづれとていづれとていづれとて置
けりともいづれとていづれとていづれとていづれとていづれとて
けりともいづれとていづれとていづれとていづれとていづれとて

第廿九段

む いむ ぶ いぶ ぶれ いぶれ

1 行の音のやハ既上卷のし部よりこれどりの辞の一統し就て行いん此音
 を唇音して此五音と唱ふ唇の動く状物と如卷如撮如回如色な
 るなり其詞を卷纏結約親巡回なり又下附て紡摘撮抓
 と云其の多る也是皆其唱るに形随て故なりなり
此後の中採扱の
 まと諭さば此の音と唱るに上下の唇の相合る形只即て物と採
 む時のまつきと回どうは故にさて此辞と活らして紡と云など
 引さあるれひ也是より何のよも緘認むすのよも云とされ皆此の形
 小うづとるやばたて下附て舌拒などハ此の音に口と閉てうけらね
 形顔のあより出幅狭なりぬも又是より出さる也
山高云月清かな
 の活 用也 くに出せる頼眺捺留恨覺などの音義もこれより准てさる
此辞の中頼捺留恨覺などの音義もこれより准てさる
此活用也さて眼とめと云も此同行の見れ活きて眼以ても
 ば終り皆同まて落り

此の依云れはぐづしたのむよを只だのむもてたのむもをいす下の六段
 此格也他とたのむもてたのむもたのむもたのむも云て此十四段の格也ま
 續 けく入 いる 沈 ちづむ 漆 ぬり 同 此類なる多し唯人
 て新しは世の人へ得る自他のちづむをまへて観るまのちづむ
 にみづつちづむと人を観るもとていふはたのむと云て一とてさね
 時をたのむもむもむもむもむもたのむも云ハ万葉に合憲と合字
 と添書て人とてれまむるまなれはまらむるハ異なり又紐鏡
 云れハ我頼入らるれ時たのむハ此れハ引その後とあり
 人合我頼入らるれ時たのむハたのむとたのむれとあり

第三十段 ぬ ぬゆ ゆる ぬん ぬゆれ
 や行を喉音三行の中より最急速にして烈しき音なり上卷ヤの部より

いづり、このゆき、彼、箭射、弓越、避、等の数、又、伊行、得行、而、まゝの一、統、
 よ、行、遣、ま、の、言、な、れ、也、ま、れ、見、聞、榮、消、絶、等、と、む、ゆ、く、ま、
 ゆ、く、ま、ゆ、く、た、ま、ゆ、く、と、ま、ま、思、思、ま、ま、ひ、の、ま、ま、
 や、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

第卅一段

る なぐる

る なぐる

るれ かつるれ
まぐるれ

此ら行の舌音ハ、彼、た、行の舌音と、異、り、て、舌の動きの和つたる、ま、
 な、行、れ、舌音と、唱、る、ふ、や、相、似、し、り、ま、れ、の、音、れ、體、言、と、延、續、け、ゆ、
 状、と、同、く、此、う、り、ル、レ、ロ、し、又、言、の、中、間、下、等、に、附、て、ま、ま、の、何、と、信、り、ま、
 也、も、中、ま、ま、ら、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 時、雨、隠、乱、焦、悴、吹、折、等、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 第卅二段 いう

此の音に、息、り、添、加、る、義、ま、ま、中、ハ、上、に、廿、一、段、の、得、條、又、廿、八、段、の、ふ、條、
 出、其、欠、を、見、合、ま、れ、な、れ、植、居、等、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 飢、く、ま、ま、人、飢、目、ば、ま、ま、ま、息、れ、け、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 くり、て、義、を、な、ま、ま、ま、又、恒、多、ま、ま、

二轉部

以上三十二段を、上段、紐、鏡、中行、中、段、紐、鏡、下行、紐、鏡、左、行、各、其、受、辭、の、三、轉、
 分、れ、ま、ま、右、の、ち、ま、れ、ハ、言、の、切、も、續、ま、も、此、段、ま、ま、上、段、を、切、
 何、中、段、ハ、音、續、く、切、も、也、已、下、十二、段、を、上、段、の、切、と、中、段、の、切、
 一、混、ま、下、段、の、切、と、三、轉、ま、ま、れ、故、ハ、中、段、の、續、く、切、も、切、
 ま、れ、ハ、切、れ、も、ま、ま、ま、上、の、廿、四、段、より、三、十二、段、ま、ま、の、ク、ス、ツ、フ、ム、
 ル、九、段、と、下、三、十二、段、より、三、十八、段、ま、ま、の、ク、ス、ツ、フ、ム、の、六、段、と、共、

第三の韻が言ふとあるたゞの故として二轉よりなるものと云に
 上の九段も同くゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 しくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 れる故に其結も二轉に分れると下六段も同く聞く格も定うに備は
 りぬぞ成とが言ふとゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 へゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 格とを相兼て二轉とあり又二轉もゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 二轉の格は活きと二轉の活きとゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 二轉の格は活きと二轉の活きとゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 又ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 二轉で其ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

此の音義ハ上廿四段を以て條に出つとも言のその方ハ大なる相同じさ
 れハ此段の聞行鳴咲解漕燒引なぞとかの解續舉懸手向明
 の類と其辭が互に相似なりゆきと此等の辭は上下二處に出るハ其
 ちる辭のトて置言を
 例に合せ考べしさて繼ハ凡て絶する物を續くるにいへ
 ば此も又切れゆる言を受て身し續は言とはなれるなり 下土
 段を續く辭の下又引などの下も置例也是切れも續きしを以
 て置る故もである若しこれと心ゆく思ふて續く言のトも
 置る例もあらずと思混じて 既し春海濱臣等も思混れ此項
 を記せしも此中段なるぬる等の下におはるべきなり
 ちるがごとし

第廿三段

くゆく

けきけ

活き状の異なる故なり。其差別をこそその受てしうくせらる。上の懸明を
はこそその結ぶてかかれぬれとくごの外の一言加れぬとくこの聞行は
れをききけぬけとけいくの言。直に換りて彼段の例れ如くふきかれとく
れとくいふごし。次々六段もに皆右の定也。此差と以て何もの辯どもとく
わいごむごし。

此木の中解と候ども自他に依て活きざるの異なるなり。既に廿六段に出。

第卅四段

よ のこせ
うつそ

せ のこせ
うつせ

此と上の廿五段のものと司ドク。音の義を上の六段のどの條より決り出たり。その後成倍支
宿散なやと彼廿五段の任寄遣瘦載失奇の活きと相似なり。

第卅五段

つ た
まつ

て た
まつ

はつとの廿六段れつと申ぐて。去唐進退所作に云活きとて活き状に依て再
ひ出さる也。音義ハ廿六段れくの條より出さる。立待打勝持分壞放なやと
彼廿六段より立出捨愛耻懼等と合して進退依行の意をわべし。
君の中立と云辭の両方に出るを自他に依て活きざるをわべし。
故也。既に廿六段より。

第卅六段

ふ いふ
はらふ

へ つい
はらふ

此ふも上の廿八段のふと申ぐ。経の義也。これ言思達習厭拂添
勻なやと。彼徳添生調存穀の類と。言のまは同じくして何れも経の
を解る中。既に彼段より。

第卅七段

む くむ
まつ

め くめ
まつ

此心も上の廿九段のむと同じ。音義そこのへと。されはるの
汲色沈住悲涼

忌樂なやと彼頼眺際留恨覺等と申ぐむの言の押へ止をあらし。
合せ考ふべし。

以中頼ハ自化ニ依テ活キざられり申。既ニ廿九段ニ出。

第廿八段

る ちる

れ せれ

此の上の三十一段を添ふと申。考義を際に出されば其の見知奇反
契終散積なやと彼流隠乱時雨悴吹折等々言の活き状のあられ
こはしりてふのをも互にゆき也。

第廿九段

ん きん

め きりめ

此んとむと別なるはあしで。本居翁のん字のんも元字の音にて古き
假字元元んかと書キ又前の句れ首に置いてんうりてんんんんんんん
のこもたは法け平しんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

差あしりけあしで。只此段より下のらんらん等の辞の格は等のむとれ

異る也。故に此段より下の言は活きのままと按ぎた。中古に絶えぬんんん

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん

おどのまの合るちりり。

凡^{四五}ふくばはふらふらぞあまはみちしねれ入るこよせこつて

はぢをぢらふもをよむらぢねむもをいそむらぢまらぢみ

ぢれらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

ぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

之^{四四}のてぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

かぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

とらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢらぢら

元より別されど。此（コレ）一（いつ）つ。彼（カ）一（いつ）つ。用（もち）ひしを。これな
 が。彼（カ）者（モノ）多（おほ）く。し（し）こ。只（ただ）相（あ）似（に）し。つ（つ）も。ち（ち）ゆ（ゆ）也（なり）。是（こ）れ。は。あ
 り。ら。し。ひ。び。び。と。さ。や。も。あ。れ。ど。も。物（モノ）の。親（な）い。可（た）ま。等（ら）し。な。ら。ず。
 云（い）ふ。た。字（じ）と。書（か）ふ。と。證（し）と。して。それ。つ（つ）の。本（もと）。つ（つ）の。つ（つ）。な。ら。ず。
 つ（つ）く。俗（よ）も。也（なり）。彼（カ）字（じ）も。々（さ）の。人（ひと）。は。た（た）と。云（い）ふ。と。書（か）ふ。と。は。あ。ず。字（じ）書（か）
 へ。了（り）。了（り）。字（じ）の。注（しゆ）ふ。也（なり）。又（また）忽（とつ）字（じ）は。注（しゆ）ふ。也（なり）。元（もと）々（々）本（もと）々（々）
 起（た）げ。於（お）こ。一（いつ）と。あ。る。ま。と。取（と）り。て。書（か）ふ。な。ら。ば。こ。れ。は。外（ほか）何（なに）の。つ（つ）へ
 れ。の。つ（つ）と。して。箇（こ）條（じょう）の。み。あ。る。し。ら。つ。と。平（ひら）き。を。な。つ。と。し。時（とき）き。也（なり）。
 悉（ことごと）く。本（もと）の。も。よ。及（およ）び。て。は。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。
 也（なり）。耳（みみ）疎（そ）ま。り。あ。り。の。み。も。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。
 也（なり）。ゆ。こ。し。を。と。り。て。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。

〇二〇

ともは 徒は 受 辭

一（いつ）行（い）け。音（ね）は。毀（こ）感（かん）斬（ざん）刻（かく）痲（ま）碎（さい）溢（あ）り。消（しょう）焦（じょう）哀（あい）殺（ころ）す。の。刺（さ）
 鑿（たく）ら。身（み）も。う。ろ。て。痛（いた）ま。ま。の。あ。ら。う。何（なに）が。い。は。れ。ず。は。く。も。い。は。れ。ず。は。く。も。い。は。れ。ず。
 一（いつ）を。と。り。て。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。
 歎（なげ）息（いき）の。声（こゑ）也（なり）。此（こゝ）外（ほか）に。あ。ら。し。し。即（すなわ）ち。あ。ら。し。の。義（ぎ）也（なり）。あ。ら。し。ハ。痛（いた）耶（や）也（なり）。
 也（なり）。ゆ。き。な。ど。の。れ。も。在（あ）ら。べ。し。即（すなわ）ち。あ。ら。し。の。義（ぎ）也（なり）。あ。ら。し。ハ。痛（いた）耶（や）也（なり）。
 也（なり）。是（こ）れ。は。裁（き）の。も。と。の。み。も。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。
 一（いつ）と。也（なり）。を。と。り。て。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。
 一（いつ）と。也（なり）。も。あ。ら。し。し。も。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。
 一（いつ）と。也（なり）。も。あ。ら。し。し。も。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。
 一（いつ）と。也（なり）。も。あ。ら。し。し。も。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。
 一（いつ）と。也（なり）。も。あ。ら。し。し。も。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。
 一（いつ）と。也（なり）。も。あ。ら。し。し。も。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。

待（まち）人（ひと）も。お。も。の。ゆ。こ。し。を。と。り。て。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。
 一（いつ）と。也（なり）。も。あ。ら。し。し。も。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。も。し。あ。ら。ば。い。は。れ。ず。也（なり）。

きまふれはとくまてかきまはるしむらりなもくた
ともめりてくまのしりふり改くまげりりてまうらみ
しりまのたりしむらりてははるまふらりてん
ちもちりやくくまの神をさやしその庭ふらき
とほくまらるるもあふくはるまらりてんてんてん

三月五日

東京 北畠千鍾房
書肆 須原屋茂兵衛



日本橋通貳丁目

